

基調講演 自己・他者・世界への基本的信頼をどう育むか 今、若者を理解し、若者と育ちあうために



菅間正道さん



自由の森学園校舎

すがま まさみち
自由の森学園高校 菅間 正道さん

2月17日に川越市で開催されたフォーラムは「若者の働きやすい社会とは」をテーマに130名の参加がありました。日々若者と向き合う菅間正道さんは、基調講演で現代若者と育ちあうためにどうすべきか話されました。若者が置かれている状況を知り、ワーカーズ・コレクティブの役割を確認する機会となりました。

「若者ことば」から見えてくる世界

作家・井上ひさし氏によると、「ことばは世界に区切りを入れる作業」であるという。例えば、イヌイットは雪について何十もの名づけをし、日本では雨や風を細かく分けて名づけている、つまりその共同体にとって生活を根本的に左右するものには丁寧な名づけがされる。現代の若者が「人間関係」や「関係性」について名づけることばはどうだろう。「KY」「友だち地獄」「ヨッ友」「便所飯」「コミュ障」等全般的にネガティブである。この名づけことばが若者の生活の根本を表しているのならば、現代の若者は「自己・他者・世界」と出会い、信頼し、受け入れることに課題を抱えているといえるのではないか。

自己と他者と世界に対する「基本的信頼」をどうつくるか。「この世界は生きるに値する」ということを、どうやって若者と紡いでいけるのか。それは決して一筋縄ではいかないが、まずもって、様々な若者の実存を理解し、彼らの声を丁寧に聴きとることを大事にしなければならない。

基本的信頼のために必要な二つの「あい」

世界との信頼をつくっていく第一歩は他者との出会いからである。出会い、対話することから基本的信頼はつくられるのだが、とどまるところを知らない「学力競争（狂騒・狂走）」により、テストの勝ち負けに追われる日々では、他者を認知し信頼することなど無理だろう。そして、自分づくり、仲間づくりをめぐる困難やネットの氾濫。ネットの発達はやラブの春の拡散にも、いじめにも作用する。地球の裏側で起きていることを知るツールとしてのネットを否定はしない。要は使い方だが、小学生が「いいね」の数を気にする

時代となっている今、丁寧に言葉を紡ぎ、相手の表情を見ながら関係をつくっていくことが困難な状況にあるのは間違いない。

ではこの状況にどう向き合うか？大事なことの一つに、二つの「あい」がある。一つは、学びあい、支えあい、聴きあい、かかわりあい、活かしあい…の「あい」である。ともに「～しあう」という相互交渉と互惠の関係である。もう一つの「あい」は、〈I=私〉、一人称の「あい」である。その他大勢に埋め込まれない、他者に流されず自分の意見を言える〈私〉。この二つの「あい」を持つことで「基本的信頼」は育っていくと考える。

ワーカーズの現場も

若者を受け止め、こたえる場所になる

自分のことばを持つということは、自分の認識と意見をしっかり持つことにつながる。子どもが豊かなことばを獲得していくためには、丁寧に聴きとられるなどのゆたかな相互応答経験が大事である。人が人として育っていくうえで、人は欠かせない。自分が発したことばに応答してくれる誰かがいることが大切なのである。

ではそういう環境をどうつくったらよいのだろうか。青年期・働く現場での「基礎経験」の再構築としてワーカーズの働き方も、その試みの一つではないかと考える。大きく世界を変えるというより、身近な職場で足元から少しずつこの社会へ風穴を開けることができるのが、ワーカーズなのではないだろうか。

社会問題は人々の簡単な努力や運動では解決しない。今この困難な現代社会を読み解きながら、一人ひとりが潰されないように生きていく教育や雇用の場を探求していきたいと考えている。